

「いただきます」

あつ、魚や。いややなあ。今日の夕ごはんのおかずは魚。だいたいお父さんは、自分が魚が好きだからって魚料理多すぎる。お母さんは、お父さんが料理当番のときは何も言わずにここにこしてるだけやし。わたしが魚苦手なの知ってるくせに。

「いただきますあす。」

しかたなくわたしは食べ始めた。「『いただきます』ってちゃんと言ったか。」というのがお父さんの口ぐせ。もしわすれたら大目玉。

「いやそうな声やと、魚に悪いで。」

お父さんはわらいながらそう言う。

「りょうしさんがくろうしてとった魚やしな。『いただきます』って言ってるけど、サトコは何をいただくんや。だれに言ってるんや。」

また、お父さんのお説教が始まった。そんな夕ごはんを「いただきます」やし、作ってくれたお父さんに言ってるに決まってるやん。するとお父さんが言った。

「夏休み、和歌山のおばあちゃんちに行くやろ。そのとき、いいとこ連れて行ったら。」

夏休みに入って、わたしたちは和歌山のおばあちゃんちに行った。和歌山県はお父さんのふるさと。海のすぐそばで海水浴もできるし、わたしは大好き。

「サトコ、よう来たな。まあ上がり。」

おばあちゃんは、いつもやさしいえ顔で出むかえてくれる。

「サトコにおいしいもん食べさしたると思って、近所のりょうしさんにたのんでたんや。」

おばあちゃんが持ってきた白い発泡スチロールのケースを開けると、中にはイワシやアジなんかがいっぱい入ってる。ありゃ、まさかの魚。

ピカピカ光るイワシを、さっそくおばあちゃんがさし身にしてくれた。せっかくおばあちゃんがわたしのために用意してくれたんだし。おそろおそろわたしはイワシを口に入れた。

「おいしい。」

本当においしいよ、おばあちゃん。すると、小さなアジを包丁でほねごとたたきながら、おばあちゃんが言った。

「そうやろ。こうしたら、ほねまで食べられるで。生きのいい魚はうまいし、ほねごと食べるら体も強くなる。魚の命、丸ごといただくいてるんやからな。」

なるほど。体が強くなるのはうれしい。ん、命をいただくって。

「あまった魚は煮付けたり、開いてひ物にしたりするんや。そしたら日持ちするしな。くさって食べられんようになつたら、とった魚にもうしわけないやろ。命ムダにしたらバチ当たる。」

お父さんがそう言った。「とった魚にもうしわけない」か……。

次の日、お父さんが前に言ってたいいところに連れて行ってくれた。太地町にある「くじらの博物館」。くじらりょうのことなどがとてもくわしく分かって楽しかった。それに、くじらのひげは昔、おもちゃのゼンマイに使われていたこととか、あぶらからローソクやけしような品が作られていたことなんてぜんぜん知らなかった。びっくり。



くじらの博物館



くじら供養碑